

■トピックス

VR文化フォーラム 「鉄道とシミュレータ」

西村邦裕（東京大学）



*口絵にカラー版掲載

2008年11月11日に、埼玉県さいたま市にある鉄道博物館にて、VR文化フォーラム「鉄道とシミュレータ」を開催した。立体映像産業推進協議会の立体協シンポジウムとの合同企画の開催であった。

会場である鉄道博物館は、2007年10月に開館し、1年間で188万4千人もの来館者があった人気博物館の一つである。鉄道というコンテンツを持つ博物館である。今回は、財団法人東日本鉄道文化財団、鉄道博物館の関係者の方々のご厚意により、休館日に特別開館していただき、見学ツアーとシンポジウム、懇親会からなる充実した企画となった。普段であれば混んでいるシミュレータやジオラマ、展示などを少人数で見学・体験できるとも良い機会となった。

今回のテーマは「鉄道とシミュレータ」である。鉄道博物館には、いくつかの鉄道シミュレータが入っており、その中で傑作が蒸気機関車D51のシミュレータである。D51のシミュレータは、音、振動、運転操作、表示盤の動き、映像、投炭などをシミュレートしており、VRの目から見ても興味深いシミュレータである。今回の企画では、このD51のシミュレータの制作者である株式会社音楽館 代表取締役の向谷実氏を迎え、制作にまつわる話を語っていただいた。シミュレータ全般については、東京大学大学院情報理工学系研究科の廣瀬通孝教授から、そして、シミュレータの利用方法については、財団法人東日本鉄道文化財団の青木邦雄担当理事からお話をいただいた。

シンポジウムには、91名の参加者があり、会場が満員になるほどで盛況なシンポジウムとなった。

まず廣瀬教授より「シミュレータとVR」と題して講演がなされた。いかに単純化し、物事のエッセンスを抽出するのか、というシミュレータ一般論の話を紹介され、デフォルメと物理的正確性のバランス、100%似せるこ

とがシミュレーションであるのか、現実を超えるシミュレーションとはなにか、ということについて言及があった。動態保存と静態保存との間にシミュレータやVRの位置づけがあるのでは、という指摘がなされた。次に向谷氏より、これまでに氏が手がけた鉄道シミュレータの話から、現在の鉄道シミュレータ、またD51の鉄道シミュレータの詳細について、興味深いお話があった。特に実写にこだわり、CGではなく撮影で映像を作っていくこと、いかに破綻なく電車を走らせ映像を取得するか、という裏話などの紹介もあった。また、シミュレータ部分については、マシン構成から計算部分の構成まで細かく紹介していただき、坂などで勾配がある際に水などの分布からボイラーのエア分けをする、といった例についても言及していただいた。シミュレータとしては、全体としてつじつまが合うように、基本的にはこの計算式に合わせ、演出はしないようにしているとのことであった。これは演出をすると、どこかで破綻が生じてしまうためである。そのため、シミュレータを運転すると、空転が起きるなど、蒸気機関車の運転の大変さを体験できるようになっている。そして青木氏からは、シミュレータを異常時対応訓練試験に利用している現場からの話をいただき、いかに事故の対応について訓練するかについて紹介していただいた。

まとめとしてのパネルディスカッションでは、向谷氏から、こだわり、リアルさ、作品としての思い入れ、などを熱く語っていただき、哲学的な部分も含めて紹介をしていただいた。

懇親会では食堂車のカレーやカシオペアでのワインなど鉄道にまつわる味も楽しめ、かつ、シミュレータも体験できたため、盛況な会となった。

最後に、(財)東日本鉄道文化財団、鉄道博物館など、関係者の方々に厚く御礼を申し上げる。